

の宮の感想は、女の本質的なものへの理解「性質のまま」が読みとれる。Iで述べた嘆きは、本質を理解する人を失った為と考えてこそ、その深い嘆きを我々が理解できるのである。

次にこれらの描写が、地の文、会話文、心中思惟のいずれに属するかを調べると、女と帥の宮の人物描写は、大部分が心中思惟、会話文により表現されている。しかも帥の宮の描写は、女の心中思惟に、女の描写は、帥の宮の心中思惟により表現されている。女の宮に対する讚美と、宮の女に対する同情的ともいえるほどの理解を、基調としている。この基調を伴い、女が帥の宮をいかに感じ、帥の宮が女をいかに理解しているか、という主観的描写である。

## 2章 その他の人物の描写

小舎人童、右近の尉、北の方、侍従の乳母の人物描写は、前に述べた二人とは、はっきりした違いを指摘できる。各一例を除き、名前のみ、または指示語がついているだけである。その例外も、帥の宮と女の描写を補う表現であり、脇役としての性格づけがなにもなされていない。

## 3章 他の男の描写

他の男の描写は、「男」のいることを認めた上で、物語の進行に沿い、そして、女の帥の宮に対する感情が高まるにつれて、また、帥の宮が女を深く理解するにつれて、変化するのである。女の内面から沸き上がる、恋愛感情の起伏高揚に伴い、曖昧な表現、現在形、過去形、「はかなきたはぶれごと」「よからぬ人々」という認識に変化し、女の立場に立った表現描写がなされている。

## 4章 人物描写

人物描写の表現を探ることにより、「和泉式部日記」は、帥の宮

と女のひたむきな恋を、他の無関係な事柄をすべてふり捨てて、女の立場から、女の感情を基調にし、女自身が書いたものだと考えるのである。

## 結論

「I 帥の宮挽歌群について」の項で、書く内面的必然性を見だし、「II 人物描写について」の項では、「女」の立場から、二人の愛の極致の追求を、他の無関係なことをすべて振りすてて、書くことが主題であることを推察した。

「和泉式部日記」は自己の恋愛を形象化したものであり、新たな創造の世界として、人生の真实性が、我々に訴えるものである。

## △良寛の歌とその一生▽

第三回卒業 若海 知子

良寛という人物のいろいろな面をみるために趣きの異なった、いくつかの歌をあげてみる。

1 かすみたつ長き春日を子供らと手毬つきつつ此目くらしつ  
2 飯こふとわが来しかども春の野にすみれつみつ時をへにけ

3 のみしらみねになく秋の虫ならばわがふところはむさしのの  
原

4 行くさ来さ見れどもあかぬ岩むろの田中に立てる。一つ松あは  
れ

5 みちのべにすみれつみつつはちのこをわが忘れてぞ来しあは

れ鉢の子

6 草の庵に足さしのべて小山田の山田のかはづ聞くがたのしさ  
7 水や汲まむたきぎやこらむ菜やつまむ秋のしくれのふらぬそ  
のまに

8 このころはさなへ取るらしわがいほは形を絵にかき手向け  
そすれ

9 月よみの光をまちてかへりませ山路はくりのいがのおほきに  
10 わがそでは涙にくちぬさよふけてうき世のなかのこともおも  
ふに

11 何故に家を出でしと折ふしは心にはちよ墨染の袖

12 足檜木の山田のかがしなれさへも穂ひろふ鳥を守るてふもの  
を

13 山かげの岩間をつたふ苦水のかすかに我はすみわたるかも

1 の歌の様に、おだやかな春の日を子供たちと手毬をついて遊ん  
だり、2 の歌の様に、托鉢に出たのに野に咲いている、かわいす  
みれに心を奪われて時を過したりするなど、彼の心が、何のこたわ  
りもなく無邪気な子供の世界や自然の中にあるのを感じる事がで  
きる。3 の歌からも、のみ、しらみに対しても、何の屈託もなく接  
し、4 の歌の様に、植物の命にまで慈愛の気持を表わしている。お  
互いに孤独なもの同士という相い通じるものの親しみを感じたので  
はなかるうか。5 の歌からも、生物、無生物という対象にとらわれ  
ず親しみを持って接する彼に、ユーモアさえも感じられる。又、6  
の歌、7 の歌から、彼の生活の一端を覗くことができる。質素な庵  
での自給自足の生活であっても、誰にも気がねのいらぬ一人住い

は、良寛にとつて、最もくつろげる所であったのだろう。のびのび  
とした明るい面をみることが出来る。8 の歌からは、農民の働いて  
いる姿を絵に描いて拝んでいたことがわかるが、良寛は托鉢に出か  
けていって近くの農民たちから施しを受けていたのであるが、農  
民に対して、これ程までの労苦を思う気持と、感謝の念は、尊く純  
粋でさえある。又、彼を訪れた友人に対しては、9 の歌からも、そ  
のやさしい気持を伺うことができる。女性的とも思われる程の繊細  
な心づかいである。いつも穏やかで、何ものに対しても寛大な愛を  
もって接した良寛ではあるが、10、11、12、の歌から全く別個の人  
間を想像するのである。この彼の嘆きは、常に彼の心の中に沈滞し  
ていて、ぬぐうことのできないものであった。そこから彼の出家し  
た原因というものが追求されるが、これは、はっきりとした理由は  
判らないのである。ただ、彼の歌から察する他ないのである。彼は  
自分自身は仏門の世界に入り、世間一般の生活から脱却してはいる  
が、それだからこそ、世の中の醜い争いなどを見るにつけ、よけい  
に世のあわれさ、というものを痛感したのであろう。そしてその度  
に己れを厳しく見つめ、己れの生きる道をしっかりと見つめなけれ  
ばならなかったのであろう。13 の歌は彼が晩年になってものだろ  
う。庵のあたりは深い雪で覆われ、一步も外に出ることができなく  
て、ただ一筋に流れる苦水だけが生きる糧であるという歌である  
が、そこに住している人間の崇高なまでの澄みきった精神を感じる  
ことができる。無欲で、飾り気がなく、ただ仏を信じ、子供の様な  
純粹な心、この歌からにじみ出る精神こそ、彼が生きようとした、  
到達しようとした人生ではあるまいか、と思うのである。